



何

度か書いているが、東奥谷教室が工事に入ってから、代わって落語の稽古場を提供してくれたのが松江歴史館と某サ高住である。どちらも願ってもない条件で、つくづく恵まれていると思う。

松江歴史館では、四月から毎週水曜午後三時半から四時半の定席になり、学校から帰ってその時間に間に合うこともたかがやってくる。来た子から高座に上がるというとてもゆい感じで続けている。歴史館の講義室から半ば吹きさらしの復原長屋に稽古場を移したらさらにゆいさが増した。江戸期の風合いの中にいると往時の時の流れにこちらの感覚が同期を始めるのだろうか。ぼくも自然と肩の力が抜け、子どもたちやお客様と軽口を叩きたくなる。

観光客がついでに寄っていくというのを想定していたが、平日の上に客足が落ちる時間帯でもあり、いつもにぎやかというわけにはいかない。ところがこのところ、寄席で見たから、とか、ここでやっていると聞いたもんだから、という近隣の人たちがぼつりぼつりと来るようになった。少しずつ存在が知られてきているようだ。

早く来た子が駐車場の車中で宿題をしていることを知った歴史館職員が長屋ですばいのにとうれしい

ことを言ってくれた。畳の上に広げた漢字練習帳に一心に書き取りをする子、それを眺めていて、「その書き順はこうじゃないの？」と教えてくれるお客さん。

そんな絵が浮かんでくる。「落語教室はこれからどうなっていくか」と思っていますか？」と新聞やテレビの取材で聞かれるたび答えに窮してしまうのだが、次はこれを語ってみようかと思う。

サ高住の稽古にも動きがあった。そこは山陰両県に幅広く展開している事業体で、どう話が経営者に届いたのか、他のサ高住でもやってくれないかという話が入った。これも前から願っていたことである。家の近くの高齢者施設に学校帰りに立ち寄って一席やる、というのは子どもが担うボランティアとしては理想型だと思ふのだ。どんなに設備が充実していても、どれだけおいしい料理が供されても、高齢者施設に決定的に欠けているのは子どもたちの姿だ。時代劇だろうと現代劇だろうと、往來のような社会的交流の場には「ワイイ」と言って走り抜ける子どもたちのシーンが決めごとのように入る。単なる背景に過ぎなくても、それを入れないとリアリティが出ない。自由な人の暮らしに子どもの姿は不可欠なのだ。落語をしに行くというのは少々変形だけれども、変形が故にお声がかかったとも言える。

老い老いに

木幡智恵美

35

前

号に夕焼け通信三百号が綴りに存在しないことを書いたところ、編集長から「四十ページで発行しています」とのメールを受け取った。かなりの圧巻だから穴を空けてファイルに綴じるのではなく、別に綴じたのかもしれないと思い、これまでの夕焼け通信を収めている箱の中を探してみると、別綴じした三百号が姿を現した。

連載しているものも含めると、何と四十人を超える人たちが寄せられている。何度か投稿してくださった方もいれば、初めてお名前を拝見する方も。安来、松江、出雲、浜田、益田、三刀屋、横田、隠岐といった県内各所から、お隣鳥取は米子、会見から。遠くは、岩手、八丈島から。そして、京都、草津、東京は世田谷、大阪、枚方からも原稿が送られてきている。

内容も、詩、俳句、随筆など様々で、『刻々を美しく』の題で講演いただき、講演録が連載された岡部伊都子氏からは、「いのち 揺れて 生きる 一九九九・八・三 一つ」の直筆が印刷されている。直筆はもう一方、里みち子氏から「こころの旅」という詩を柔らかな筆致で寄せてくださった。連載された講演録『加害者としての私の戦争体験―日本は中国で何をしてきたか』の鹿田正夫氏からは、岩波書店から送られてきた『戦後戦死者五万人の謎をとく』を読んで新たに知ったことを三ページ超の長文で綴ってくださいている。

この三百号に原稿を寄せていただくにあたり、編集長は、「今いちばんの関心事をかいってください」とお願いしている。だから、それぞれの書き手が、様々な観点で思いを文章にしている。この年に成立した国旗国歌法にまつわることで、教育問題、人権に関すること、身の回りのことなどなど。面白かったのは、『「おコメ」をどうする?』。三百号発行後四半世紀を超えた今、まさに「令和の米騒動」の中にいる。

編集長は、三百号の「はじめに」で、こう書いている。「一生懸命生きている人の、その一生懸命がずらり。続けていく元氣、たっぷりといいただきました。お一人お一人にこの場をお借りして、心から感謝申し上げます。」

この三百号は、四半世紀前を生きる人々がその時代の思いを綴った貴重な記録本だ。読み返して寄稿者のそれぞれの思いにふれ、老いた頭と身体に少し活力が蘇った気がする。

30代フリーター 倫理について考えたので、宗教についても考えてみたい。

年金生活者 倫理は人間の抱える「欠如」に根ざしている。宗教も同様だ。

「欠如」は一体だった母との別れによって生じる。それを埋めるには、他なる存在となった母との再度の一体化が必要になる。だが、それが不可能である以上、母に代わる他なる存在を求めるほかない。それが神だ。

30代 神にもいろいろある。

年金 多神教の神々は、「欠如」を手分けして埋める存在として人間の前にあらわれる。「欠如」は様々な形をとる。体力や知力の不足として、忍耐や落ち着きのなさとして、勇気や情熱の欠落として。『古事記』や『日本書紀』に登場する神々は人間に欠けがちのそれらを有り余るほど持つている。

スサノオは武勇に優れ、ヤマタノオロチを退治する英雄だ。その姉のアマテラスは天界の秩序を守る統治力を備える。イザナギは国生み・神生みでの創造力を発揮した。妻のイザナミは

愛情深く、死の淵にあつても夫を迎えようとした。

しかし、それらの力は特定の対象に對してしか発揮されない限定された力であり、欠点と表裏一体をなしている。

有り余るエネルギーを持つスサノオは暴れて田畑を荒らすなど粗暴だ。ふだん忍耐強いアマテラスは、危機に際会すると、その反動からか、引きこもる傾向があり、スサノオの乱行が続いたときは天岩戸に隠れた。

国生み・神生みに情熱を傾けるイザナギは死を忌み嫌い、黄泉の国ヘイザナミを探しに行きながら、再会した彼女との約束を破り、逃げ帰る。イザナミの愛情の深さは執念深さに形を変え、「一日千人殺す」と夫を呪う。

30代 一神教のほうには神がたったひとりで人間の「欠如」の埋め合わせを引き受けるのか。

年金 全能の唯一神だけ信じることによって、多神教の神の両面性を克服しようとしたのがユダヤ教、キリスト

教、イスラム教といった一神教だ。

フロイトの想定したエディプスコンプレックスの概念を当てはめるなら、身体および欲望でつながる母と幼児の關係に相当するのが、多神教の神々と人間の關係だ。そして、母子の間に割って入り、両者の自然性を禁じようとする父と、それに抵抗する幼児との關係が一神教の神と人間の關係に相当する。

人間は「欠如」を放置したままだと、寄る辺のない荒れ野をさまようような不安に囚われ続けなければならない。「欠如」はなんとしても埋めないと、自分の存在を確信することができない。それを乗り越える方法のひとつとして、人間は神を発明した。その神は常に神らしい姿をしているとは限らない。国家であつたり、イデオロギーであつたり、カリスマであつたり、科学であつたり、さらには無神論でさえあつたりする。このことは、人間が信仰を完全に排除できないことを示している。

30代 ただし、その形は様々に変化してきた。

年金 神を求める動因となつた「欠如」は富の稀少性に遭遇し、貧困、病氣、争闘などとして経験される。神はそれに対処できるように人間によって育てられていく。

日本で19世紀後半から20世紀中ごろにかけて相次いで成立した新宗教は「貧・病・争」の解決者として登場した。天理教、大本、創価学会、立正佼成会、PL教団といった教団に代表される。日本で近代的な資本主義（産業資本主義）が誕生し、発展していった時期だ。それまでの伝統宗教は地域共同体に根をおろし、「貧・病・争」に對する救済はその共同体が受け持っていた。資本主義はその共同体を侵食した。農村から引き離されて都市労働者になつた日本人は「貧・病・争」への対処を共同体に頼ることができなくなつた。自分で引き受けなければならなくなつた。それに手を差し伸べたのが新宗教だ。

ニュース日記 969
中村 礼治

「超多神教」の時代へ

やがて「貧・病・争」は資本主義の高度化にともなう富の稀少性の縮減によって減つていった。選択的消費の膨張、医療の進歩、社会保障の拡大が、新宗教の役割を減らしていった。

1980年代に「新新宗教」と呼ばれる宗教運動が台頭してきた背景にはそれがある。幸福の科学、オウム真理教、GLA、ワールドメイトなどで、「貧・病・争」の解決よりも自己実現、癒やし、精神的な成長、スピリチュアルな価値を求める若者を中心に広がつた。そこでは母と別れた当初の「欠如」の始原の姿が前景化している。

30代 そういふのは日本だけの現象か。

年金 日本における伝統宗教↓新宗教↓新新宗教という流れは、キリスト教圏でのカトリック↓プロテスタント↓スピリチュアル運動・ニューエイジ運動という流れと相似形をなす。近代以前↓資本主義の興隆↓資本主義の高度化という歴史の推移がその背景をなしている。

日本の新新宗教とキリスト教圏のスピリチュアル運動・ニューエイジ運動は、教団よりも個人、教義よりも癒やしを重視する傾向にある。これを延長すると、ひとりひとりがそれぞれ別の神を信じながら、それでも人と人のつながりを求めてひとつの小共同体を形成する宗教運動が想定される。そうした「超多神教」が将来の宗教のあり方のモデルのひとつになる可能性がある。